臨床心理士を目指す大学院生の継続型ベーシック・エンカウンター・グループ体験による心理的効果の研究

―アイデンティティの模索の促進に焦点を当てて―

Study of Psychological Effects by Continuing Basic Encounter Group Experience of Graduate Students Aiming for Clinical Psychologists : Focusing on Promoting Seeking Identity

西野秀一郎
跡見学園女子大学
人文科学研究科
Shuichiro Nishino
Division of Clinical Psychology,
Graduate School of Humanities, Atomi University

要　約

本研究は、臨床心理士を目指す大学院生によるベーシック・エンカウンター・グループ体験により、参加メンバーのアイデンティティの模索の促進が起こるかどうかについての心理的効果の研究である。結果は、グループ内発言やセッションアンケート調査において、自己開示、フィードバック、触発が起こっていたことが示唆された。また、グループの事前事後の質問紙調査で、モラトリアム傾向を示す「回避」「拡散」「延期」の低下傾向、「模索」の増加が認められ、アイデンティティの状態を示す「アイデンティティの確立」、「アイデンティティの基礎」の増加もまた認められ、アイデンティティの模索の促進が示唆された。特に、自身の身体感覚に焦点を当てたメンバーにおいて認知的変化や現実場面での行動変容が報告された。一方、本研究は継続型のグループ体験であり、研究以外の要因による変化も考えられ、本研究の限界点でもある。しかし、いずれのメンバーも「どうしてかわからないが」等、自己の内的な疑問に焦点があたるという、ある一定のアイデンティティの模索の促進が起こっていたということは明らかとなった。

【Key Word】継続型ベーシック・エンカウンター・グループ、アイデンティティの模索、臨床心理士を目指す大学院生、自己開示、相互交流

Ⅰ　問題と目的

1．問題

日本臨床心理士会（2016）の動向調査によると、臨床心理士（Crinical Psychologist：以下CPと略記）の資格を有する20～30代は全体の42.4%にのぼり、実務経験が15年未満のものが、全体の55.7%であることから、概ね、CPを目指す大学院生の多くは青年期を過ごした学生であることが分かる。青年期の発達課題は、Erikson

(1968)が「アイデンティティの形成（＝確立)」と述べていることや、鶴田（2001）が大学院において「モラトリアムの延長」「種々の未解決な心理的課題の先送り」という課題を残している学生が多いと指摘しており、CPを目指す大学院生にとって、アイデンティティの確立は必要な発達課題と考えられる。

2．アイデンティティの確立とは

河合（1983）は、E.H. Eriksonのアイデンティティという概念はあいまいな語で、C.G. Jungの言う自我と自己の軸上に存在し、自我の側で考えると、アイデンティティの確立とは、職業選択・配偶者選択・文化的活動選択が重要となる一方、C.G. Jungの言う自己の側で考えると、その個人が真の自己をどれほど認識しているか等が問題になると述べている。つまり、アイデンティティの確立は、S. Freudの自我に重点を置く職業や結婚選択等のアイデンティティの確立と、C.G. Jungの自己に焦点を置く自己実現を目指す、という２つの方向性がある、と考えられる。

3．グループの意義

Rogers（1970/1973，2007）はグループの効果を「個人の変化」「人間関係の変化」「組織の変化」と述べ、野島（2000）はグループの目的を「自己理解、他者理解、自己と他者との深くて親密な関係の体験」と述べており、自己理解等の促進にグループ体験は意義深い。しかし、「経験(Rogers, 1959)」の意識化や、それに基づき行動できるエネルギーが湧いてくるのは、決してグループだけではなく、個人カウンセリングも同様の効果が期待される。

では、なぜ本研究でグループ体験を試みることに意義があるのか。それはアイデンティティの確立を目指す事と、(個人臨床とグループ臨床）２つを技法として使えるということ（野島ら，2017)」であり、今後ますますスクールカウンセラー（School Counselor：以後SCと略記）やCPの活躍が期待されるフィールドは基本的に集団場面が多いことからも、グループ体験をすることは意義深い。

4．エンカウンター・グループについて

下田（2016）がエンカウンター・グループ（Encounter Group以下EGと略記）とは「10人程度の基本的には相互に未知のメンバーと１～２名の通常『ファシリテーター』と呼ばれるスタッフからなり、メンバーの心理的成長とメンバー同士の深い出会いを目指すグループ（それがいくつか集まって一つのワークショップを構成することもある）で、２泊かそれ以上の合宿形態をとるものが多い。そこで、スタッフがプログラムを定めることなく、グループの流れは、(スタッフも含めた）構成員の自発的な言動を重ねられることによって作られてゆく（そこのため、スタッフがプログラムを組んで進めてゆく『構成的グループ』に対して『非構成的グループ』と呼ばれることが多い）ものである」、と述べている。

ちなみに、EGには大別すると構成的EGと非構成的EGがある。構成的EGとは、ファシリテーター（Facilitator以下Fac.と略記）が提示する一定のプログラムを中心に進められていくものであり、非構成的EG（ベーシック・エンカウンター・グループに同じ：Basic Encounter Group以下BEGと略記）は、Fac.を含めたグループの自発

的・創造的なプロセスを中心に進んでいくものである（野島，1989）。

このことから、プログラムを進めるよりも、特にテーマなく、今ここでやりたいこと・やれることを自発的に進む方が、アイデンティティの模索の促進が活性化されると考え、BEGを選択した。

5．先行研究

先行研究として二ノ宮（2008）の同様の研究があるが、本研究はより異質性の高いグループ（学年の区別なし）を心掛け、いわゆるE.H. Eriksonのアイデンティティの模索の促進という心理的効果を明らかにすることを主眼としている点が違い、本研究の意義があると考えられる。

6．目的

以上の事から本研究の目的は、CPを目指す大学院生のBEG体験による心理的効果（アイデンティティの模索の促進）を明らかにすることである。

Ⅱ　方法

1．グループの方法

（1）研究協力者（メンバー）

研究協力者はCPを目指す大学院生6名（20代の男女）で、X大学臨床心理学専攻の大学院生に「研究協力へのお願い」を配布し、自主的に参加する者のみを対象とした。

（2）研究期間、スケジュール、セッション時間、回数、場所

研究期間は、2017年4月～2018年1月である。セッション時間は、12：45～15：45（うち、15：30～15：45まではセッション・アンケート記載）。回数は全6回。スケジュールは、第1～4回目は隔週、第5～6回の間は都合上毎週とした。場所はX大学の講義教室を使用した。部屋は机を壁に寄せ、椅子に腰かけて車座になる形であり、飲み物・お茶菓子を用意した。

（3）**Fac.**

Fac.とは、Rogers（1970/1973）の言う「促進者」のことである。介入方法は、特にテーマを設定することなく、メンバーの「今ここ」での実感に寄り添い、素直・率直・正直に、自己開示し、安心安全な場の醸成に努めることとする。介入時期は、①インストラクションとして、BEGとは・目的・基本的参加態度・守秘義務を伝える。②介入方法で述べた介入を必要に応じて行う。また、Fac.はセッションごとにベテランスーパーバイザーに、事前スーパービジョンと、セッション後毎に1時間程のスーパービジョンを受けてセッションに臨んだ。

2．研究の方法

（1）質問紙調査

1）事前アンケート調査（モラトリアム尺度・アイデンティティ尺度：下山，1992）と参加者カード（野島，1982）記入

事前アンケート調査とは、モラトリアム尺度（下山，1992）：24項目、4因子、3件法（若干の修正を入れ、採用する）、また、アイデンティティ尺度（下山，1992）：20項目、2因子、4件法から成る質問紙である。プライバシー保護の観点から「1701」などの通し番号を付記した資料を配布し、無記名のまま回収し、連結可能匿名化をした。

参加者カード（野島，1982）とは、参加前に記述する「参加前の気持ち」「グループへの参加意欲」「グループへの期待度」

「参加後の気持ち」「グループへの満足度」を自由記述・あるいは7件法で選択してもらうものである。

2）BEG体験と毎セッション終了後のセッションアンケート（野島，1982）

セッション・アンケート（野島，1982）（Session Questionnaire：以下SQと略記）とは、そのセッションの自身とグループの感想を記載するものである。

3）事後アンケート調査と事後参加者カード記入

全6回のBEG体験が終わった直後に、事後アンケート調査・事後参加者カードを記述する。事後アンケートとは、上記の事前アンケートと同様のものである（通し番号の記載はなし）。

（2）面接調査

1）半構造化面接調査【BEG体験終了後から1ヵ月後】

BEG終了後1ヶ月以内に半構造化面接を行い、①グループ体験を通して心の中で起こっていたこと、②グループを体験したことによる自身の心の変化について、③グループ体験をしたことで自身のアイデンティティにどのような影響があったか、を語ってもらう。

2）フォローアップ・セッション【BEG体験終了後から3ヶ月後】（Follow-up Session：以下F-Sec.と略記）

半構成的エンカウンター・グループ（森園・野島，1997）を参考に、「今振り返ってみて、BEG体験が、アイデンティティの模索にどのような影響を与えているか」を語ってもらう。

（3）録音と逐語録の作成

全グループ体験・半構造化面接・F-Sec.をICレコーダーに録音し、逐語化し、内容分析的に検討を行う。

（4）分析方法

質的分析は、BEG体験・面接調査・参加者カードの自由記述・SQを内容分析的に試みた。量的分析は、事前事後の質問紙調査・SQにおける参加意欲・グループへの期待度・グループへの満足度・参加者カードにおけるグループの魅力度の変化を内容分析的に試みた。また、投稿前に本論に記載されている内容をメンバーに確認・承諾を得た。

（5）倫理的配慮

本学倫理委員会において承認を得られた（申請番号17010）。

Ⅲ　グループの経過と個人のグループ体験における効果

1．グループ直前の様子

事前参加者カードのデータ（カッコ内は、参加意欲・期待度）より、A：EGの関心、自分の事を理解したい（6・5）。B：（1回目不参加により）上手く入れるか不安（6・5）。C：どのような感情に出会えるか楽しみ（7・7）。D：自分の意見を出すのが苦手で不安（5・5）。E：自分の事を知っていくことは緊張する（6・5）。F：グループへの興味、勉強意欲（6・5）。

2．セッションごとの経過と個人のグループ体験

（1）セッション1

＊グループの経過：Cの職業アイデンティティの模索に触発され、F、Aも自己開示する。特にCに焦点が当たり展開し、各人ある一定の自己開示がなされる。

＊メンバーの感想（魅力度）：A：積極的に話しに行った（5）。B：不参加。C：自分にない視点を得ることができました（7）。D：自分だけしか感じていないかもしれない、と思っていた事柄に対し、共感を示されることが多く、少し安心した（3）。E：自分の過去から今までを改めて向き合うこととなった（6）。F：話者になり注目されるのが少し緊張したが、自分の中で出したいものはあったので、出したい＞辛い、緊張だった（7）。

（2）セッション2

＊グループの経過：Fac.から「CPとして」というテーマを強調して始まる。Cから他職種連携の難しさに焦点が当り、Cに触発されて、Aの今後やりたいことが語られるが、やや手立てを巡る議論的様相を呈し、Fac.から中断の介入がある。休憩を挟み、Eが体験学習による認知の変化、Fが職業アイデンティティを巡る疑問、Cの持論、Aの過去の深い自己開示がされる。再びFのテーマに戻り、CとAも触発を受け、自身のアイデンティティにまつわる自己開示をする。

＊メンバーの感想（魅力度）：A：説明を増やす一方で、結果的に理解されず困った、いらだってしまった（5）。B：入りづらさを感じた（4）。C：「あぁ、自分はこのように思っていたのだなぁ」と感じた（7）。D：話になかなか積極的についていくことができず、とまどいと残念感が強かった（5）。E：CPとして自分はどうありたいのか、漠然としていて話すことができないもどかしさを感じた（6）。F：自己開示をして泣きそうになったが、言わなかったほうが良かったわけでもないので、少し不思議な感じ（6）。

（3）セッション3

＊グループの経過：雑談的な会話からスタートし、Fの職業アイデンティティをめぐるテーマからぐっとグループが進む。Eがこのセッションの始めに少し話していた内容にFac.が焦点を当て、Eが自己洞察する。Aも触発を受け自己開示するがやや不安や心配が顕在化し、そこに焦点が当たる。休憩を挟み、Aの怒りに対するテーマで相互交流が起こる。

＊メンバーの感想（魅力度）：A：メンバー同士で支えあっているそんなあたたかな感じ（6）。B：とてもいづらい（4）。C：内面とゆっくり向き合え、少し多く自己開示できた気がする（7）。D：今までの中で一番素直に話すことが出来た（6）。E：「あーこういう特性持っているんだな」と新しい発見があった（5）。F：伝えたいことが上手く伝えられない（言葉が出てこない）のがもどかしく感じた（5）。

（4）セッション4

＊グループの経過：Fac.がBに焦点をあて、自己洞察を伴いBが語る。Eが提示したテーマから、Fのエピソードに焦点が当たり相互交流が起こる。その後、Fac.がEへの印象を語り、Eが自己洞察する。Cが触発されて家族を巡る自己開示をする。一方、Cの自己開示に影響を受けたAが混乱し、Aに焦点が当たる。一段落したところで、Fac.から再度Eに焦点を当てなおし、一定の深まりを見せつつ、それ以上は進まない。最後に、B

から居心地の悪さが開示される。

＊メンバーの感想（魅力度）：A：Fac.の役割がどういう立ち位置なのかが気になった（5）。B：グループの中にいるというよりは、ながめている感じ（4）。C：自分の考えや感情が否定されたように感じた（7）。D：「これ話したいな」と思っていても、恥ずかしさやためらいがあった（4）。E：自身の新たな一面を知れた（7）。F：自分のその時の対応について肯定的に考えられるようになれて良かった（6）。

（5）セッション5

＊グループの経過：Bが率先して自己開示し、それに触発されて、各々のアイデンティティにまつわる自己開示がされる。特にDのテーマでグループが進んで行く。しばらくすると、Bの身体化が焦点化されるが、Bもあまり言葉にならない。休憩を挟み、再度Dに焦点が当たり、触発されたEの体験と共に進む。AがDとEの話に触発されたことを語るがある言葉を巡り、Fac.とAの間で議論的様相になる。

＊メンバーの感想（魅力度）：A：後半ではイライラとやるせない感じ（6）。B：あたたかく、のんびりした雰囲気（5）。C：自分の考えをそのままみんなに出せた（6）。D：自分の中でずっとくすぶっていながらも考えようとしていなかったことを、じっくり考えて話せたと思うが、結局何が言いたいのか分からなくなってしまった点もあった（5）。E：他の人がイライラしているのを見て、こっちが動揺した（5）。F：話がセッションを重ねるごとに深いものになっている気がして、ちょっと話しづらい（5）。

（6）セッション6

＊グループの経過：F、Aが職業アイデンティティと自身の「生き方」にまつわる開示がある。続けて、Dの自己開示があり、Aが触発されて自身の体験を語る。休憩を挟み、Eの自己直面が語られ、Fも自己直面の話題を提示する。その後、各々のグループ体験の感想が語られる。

＊メンバーの感想（魅力度）：A：もう少し継続したいな（7）。B：他のメンバーと同じような体験をしている途中であることをいえて、またそれを否定されないことで安心感を覚えた（6）。C：複数人が長い時間何も話さないという時間を楽しんでいた（7）。D：自分の気持ちを吐き出すことができ、それを受け入れてくれるグループが、とても嬉しいと感じた（7）。E：今までの自分では考えられなかったポジティブな面について考えることとなった（7）。F：話の内容を噛みしめる良い時間でもあった（6）。

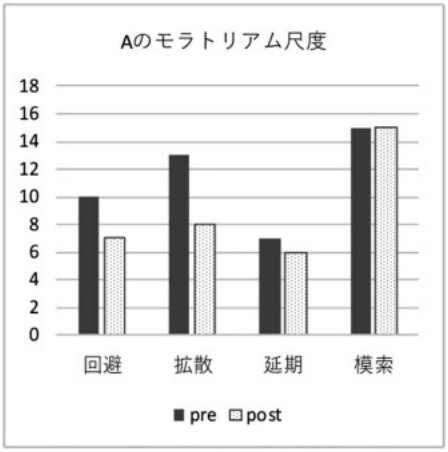
3．グループ直後の様子

（1）事前事後のアンケート調査

6名の参加者のモラトリアム尺度とアイデンティティ尺度の事前事後の調査結果は、Table 1 ～Table 6 のとおりである。

（2）事後参加者カードのデータ（カッコ内は満足度）

A：心の動きのあるグループ体験。グループが好きだなぁ（7）。B：自分と同じような、まよいやなやみを抱えていたり、あたたかく、受け入れてくれて安心（6）。C：自己につい深く考えることが



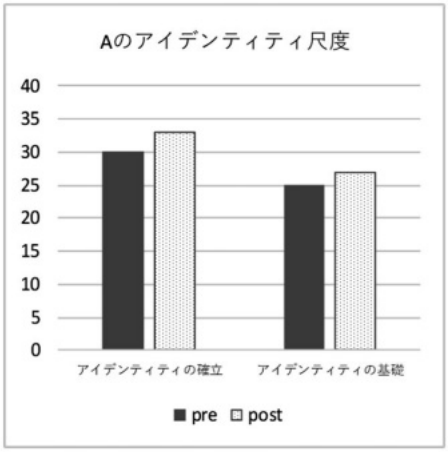
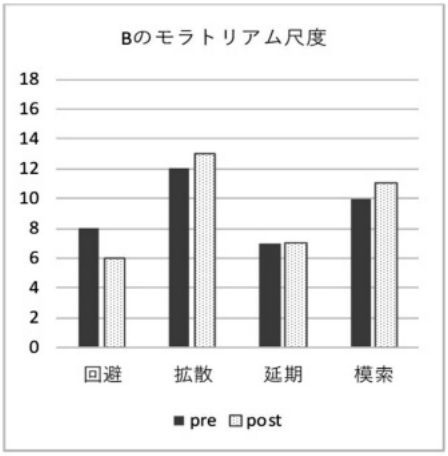


Table1　Aの事前・事後のアンケート調査の結果



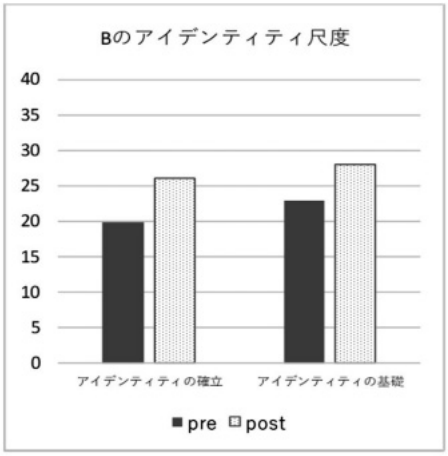
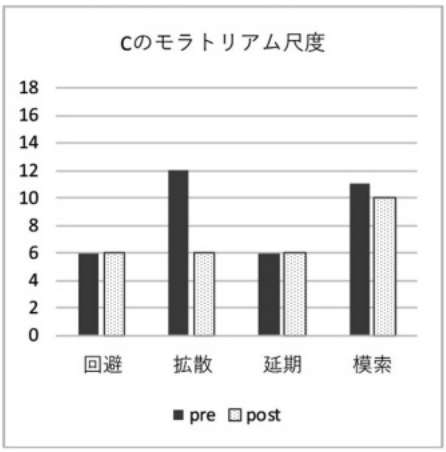


Table2　Bの事前・事後のアンケート調査の結果



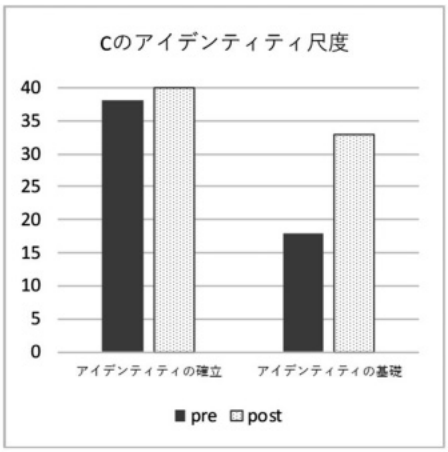
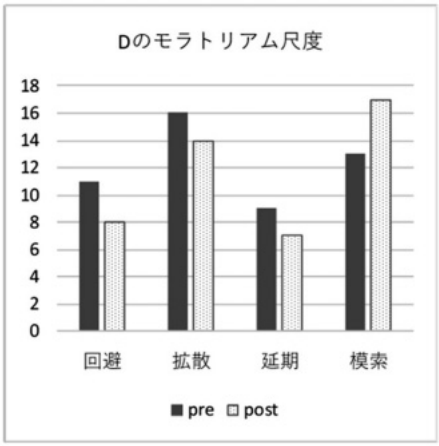


Table3　Cの事前・事後のアンケート調査の結果



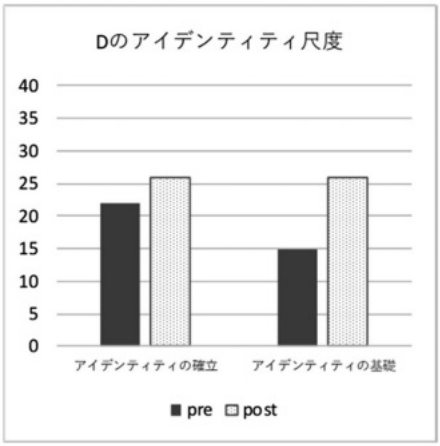
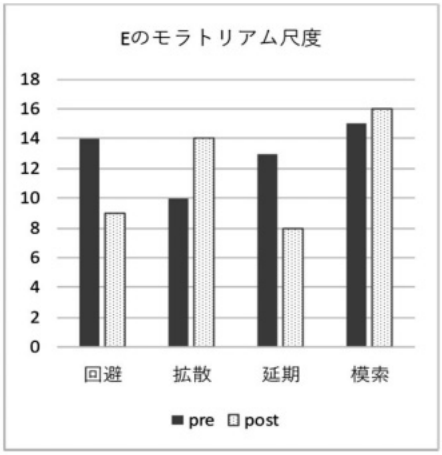


Table4　Dの事前・事後のアンケート調査の結果



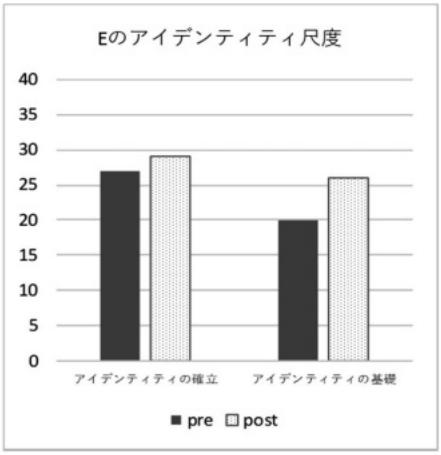
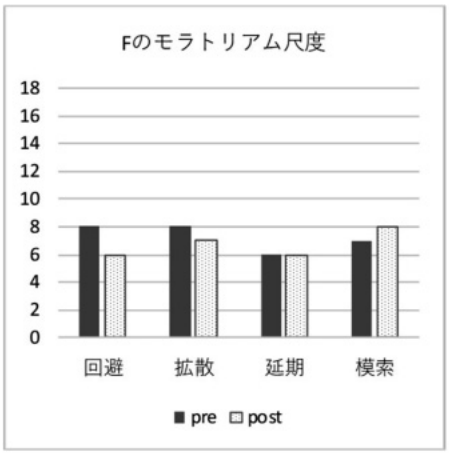


Table5　Eの事前・事後のアンケート調査の結果



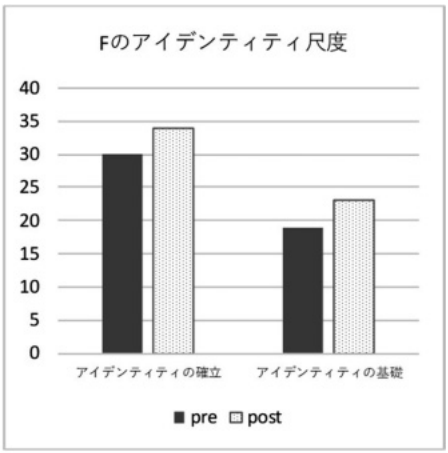


Table6　Fの事前・事後のアンケート調査の結果

できた。（7）。D：これからに向けての方向性が見えた（6）。E：自分のポジティブな面も見られるようになった（6）。F：気になっていたことを検討できてよかった。（グループが）好きだなと思う気持ちが強く出てきた（7）。

4．その後の変化

（1）半構造化面接

A：共にいるが巻き込まれないで、そこにいられる感じができてくるようになりそう。B：しゃべるのがすごい怖かったが、聞いてくれたし、むしろあったかい体験だった。C：話をしたことで受け入れてもらい「あぁ、自分っていいんだ」と思えた。D：途中から無理に話す事はないなぁと思い、ゆっくりした時間の中で、思った事は言おうかなぁと考えが変わった。E：自身のネガティブに捉えられるようなことも、ネガティブではない一面があることに気付いて嬉しい。F：他者からの反応がちゃんと返ってくるかどうか不安。

（2）フォローアップ・セッション（F–Sec.）

A：ある一定の分野のイメージがつき始め、端的に考えてやんなきゃいけないときがある。B：無理していたことに気付いき、「焦らなくても良い理由」を思い出し、落ち着いた。C：子供のことを考えることが好きなのだと、改めに意識化された。D：セッション後は外部でも自身の意見を言えるようになっていた。対人関係でも、受容するだけではなく、直面化出来るようにもなってきている。自身の興味を持ち始めている分野が持て始めている。E：働きたい分野の輪郭が見えてきた、劣等感が強く、勝手に相手が私をどう思っているか判断して合わせて行動してる部分があることに気付けた。F：誰かが頑張っている事を見る事や、応援したくなる事、人の話を聞くこと、が好きなんだと実感。今自分が心が動いている方向のものを勉強して、就職を考える時期になったら決められればいいかなぁ。

Ⅳ　総合考察

1．各メンバーに対するコメント

Aについて：第2セッションの「自分とぴたっとするものに出会いたい」、SQの「あたたかな感じもした」など、相互交流が起こっていたと考えられる。徐々に、一貫したテーマと思われる「自分の人間性」「『私はこういう人間です』という哲学を持つこと」という発言の増加、事前事後の質問紙調査の「アイデンティティの確立」「アイデンティティの基礎」が共に増加する等、「自分の人間性」あるいは「自分の生き方」にまつわる一定のアイデンティティの模索の促進が起こっていた可能性が示唆された。

Bについて：半構造化面接で「実習で戸惑いがあり、自分の土台がふわふわしていたが、グループで話したり、話を聞いたり、『これでいいんだ』とつなぎ合わせられた」ことや、F–Sec.で「心理士として仕事をしたいなら、『外に出てから3年目からじゃないか』って言われた言葉」により、不必要に焦らなくてもいいと意識化され安定感を取り戻した、と推察され、ある一定のアイデンティティの模索の促進が起こったと思われる。

Cについて：もともと一定のアイデンティティの確立があり、その上で、第2セッ

ションの「自身のテーマとなりうることがクリアになってきた」「その子にこれが合うから、これで支援」や、SQでは「自分はこのようにおもっていたのだなぁ」など言語化・記述化、事前・事後の質問紙調査における、「アイデンティティの基礎」の増加により、自身のアイデンティティの輪郭がはっきりしてきたのではないかと思われる。

Dについて：半構造化面接で「途中から無理に話す事はない、ゆっくりした時間の中で、思ったことを言おうかなぁと考えが変わった」という認知的変化や、「途切れ途切れでも話せた」等の行動変化もあったのではないかと考えられる。また、SCとして他職種連携が求められている現場で、「葛藤しながらも模索し、共にいる」という力、すなわちフェルトセンスを掴み、言語化していく一連の作業がDに起こっていたのではないかと思われる。また、質問紙における「模索」「アイデンティティの基礎」も大きな変化を示しており、一定のアイデンティティの模索が起こっていたことが推察された。

Eについて：自身の新たな一面（例ば、沈黙が嫌、人を楽しませたくなる）に気付いた事や、CPとして、初期の「全く想像ができない」から、第５セッションの「ある分野で働きたい」や、F–Sec.の「漠然と『この分野』で働きたいなぁ」、質問紙の「模索」が起こり始めていることや、「延期」が低下している事、Eの「自分は変わりたい」という気持ちが意識され始め、アイデンティティの模索が促進されたことが伺われた。

Fについて：職業アイデンティティに関して、もともと一定の焦点化がなされており、一貫して「心理か教職か」と模索し続け、最後のF–Sec.では、「今はっきり決めるのは辞めようと思っている」という決意表明が示されたこと、「アイデンティティの確立」「アイデンティティの基礎」の増加からアイデンティティの模索があったものと推察される。

２．メンバーの心理的効果

（１）グループで起こっていたこと

野島（1983）は、EGにおける個人過程の概念化の試みとして、「主体的・創造的探索」過程、「開放的態度形成」過程、「自己理解・受容」過程、「他者援助」過程、「人間理解深化・拡大」過程、「人間関係親密化」過程の６つをあげている。本グループで起こっていた事を要約すると、（どれもスペクトラム状として経験されていると思われるが）自己開示し、フィードバック・触発を受けた、ということと思われる。

（２）事前事後の質問紙調査の結果

モラトリアム尺度の「回避」「拡散」「延期」の低下、「模索」の増加、アイデンティティ尺度の「アイデンティティの確立」「アイデンティティの基礎」の増加により、グループ体験によりアイデンティティの模索の促進が示唆された。一方、本研究は継続型のグループ体験であり、日々自己研鑽をし、なおかつ臨床心理学専攻としての大学院教育を受けている院生を対象にしているため、一概にグループの影響とは言い切れない。しかし、すべてのメンバーから「わたしはなぜか○○であり、」等、自己の内的な「疑問」に焦点が当たり意識化されたことは、アイデンティティの模索の

促進であるといえるだろう。

（3）フェルトセンスに焦点を当てながらグループにいること

あるメンバーが、自らのフェルトセンス（Gendlin，1978）に焦点を当てていると、行動変容・認知的変化があったと記述または陳述している。

具体的には、グループ初期に「自分の意見を出そうとすると、喉のあたりでつっかえてしまう感覚がある」等、フェルトセンスに焦点を当てていたことが伺える。そしてグループの途中から、「最初は不安が強く、セッションの部屋の扉が初めのころは重厚で抵抗があったが、最後の方は気軽に入れていた」「学外の研修で、自分の意見を言う機会で、ちゃんと自分の意見が言えるようになった」などの認知的変容・行動変容があったと推察される。まさに「言葉にしがたい内的な気付きや身体的な感覚（Cornell，1994/1996）」をじっくり味わったことで、フェルトシフトが起こったことが考えられた。このような身体感覚に焦点を置けることもBEGの有意性と考えられる。

3．Fac.の役割

野島（2000）はFac.の基本的在り方として、「個人の状態を把握しようとする視点」と「グループの状況を把握しようとする視点」という2つの視点、「他者を援助する立場」「他者から援助される立場」という2つの立場、メンバーなりグループなりの「活性化」と「サポート」という2つのファシリテーション機能、を挙げている。

（1）良かった点

Fac.の自己開示：「Fac.の自己開示があり、話しやすかった」等のSQ記述や、Fac.自身も話せてよかったなぁと心地よい感じを覚えた。

グループの活性化を促すような介入：認知や思考面に偏りすぎる場面において、Fac.の介入が、グループのその後の活性化を促した可能性がある。SQにも「止めてくれてよかった」等の記述が見られた。

姿勢・関心の置き所：SQで「沈黙時に話題を提供しようとしないため内面とゆっくり向き合えた」等、メンバーの実現傾向に信頼を寄せていた。

（2）悪かった点

洞察の未熟さ：「変わりたい」というメンバーの心的事象ではなく、エピソードの事柄に焦点を当てていた事や、仮定のエピソードに、具体的意味を見出そうとして、焦点化する場面など、洞察の未熟さが浮き彫りとなった。

4．本研究の限界と課題

①構造：継続型のグループの場合はグループの要因だけではなく、他の様々な要因が絡み合っていることから、一概にグループの効果とは言えない。一方、全てのメンバーの発言に「どうしてかわからないが」「自分がどうして○○なのか」といった内的な疑問に焦点が当たり意識化されたことは、グループの要因と言えるだろう。

②グループの効果測定：本論のように効果研究と題しているが、あくまでも推論のもと記述されており、事例研究という位置づけに変更した方がいい可能性がある。ただ、このあたりの検討が不十分なため、今後のさらなる研究に努めたい。

付記

本論は、平成29年度の修士論文の一部をまとめたものである。

謝辞

本論文の執筆にあたり、お世話になった方々・組織を列記する。深謝したい。様々なサポートを下さった指導教員の野島一彦先生、６名のメンバーの皆様、心の支えになったグループ研究会の先生方、セルフ＜自立＞カウンセリング研究所の皆様、東京カウンセリング技術研究会の根岸常美先生と皆様、北海道応用心理学教室の戸沼文子先生と皆様、様々な資料をご提供くださった法政大学名誉教授の清水幹夫先生。妻、そして家族に感謝したい。ありがとうございました。

引用文献

Cornell, A.W.(1994). Focusing Student Manual Student Manual 3ed. Berkeley Focusing Resources/村瀬孝雄監訳，大澤美枝子・日笠摩子訳（1996）『フォーカシング入門マニュアル』，金剛出版.

Erikson, E.H.(1968). Identity Youth and Crisis. W.W. Norton & Company, Inc. New York./岩瀬庸理（1973）「アイデンティティ」誠信書房.

Gendlin, E, T.(1978). Focusing. Bandam Books/村山正治・都留春夫・村瀬孝雄（1982）『フォーカシング』，福村出版.

河合隼雄（1983）．岩波講座『精神の科学６　ライフサイクル』，岩波書店，２－54.

森園絵里奈・野島一彦（2006）.「半構成方式」による研修型エンカウンター・グループの試み，心理臨床学研究，24（3），257-268.

日本臨床心理士会（2016）．第７回「臨床心理士の動向調査」報告書.

二ノ宮英義（2008）．臨床心理系大学院生のための学年別の２つのエンカウンター・グループの試み－修士課程および専門職学位過程の１年生と２年生を対象として－，九州大学心理臨床研究，(27)，51-59

野島一彦（1982）．エンカウンター・グループ構成論．福岡大学人文論叢，14（1），１-32.

野島一彦（1983）．エンカウンター・グループにおける個人過程－概念化の試み－，福岡大学人文論叢，15（1），33-54.

野島一彦（1989）.「構成的エンカウンター・グループと非構成的エンカウンター・グループにおけるファシリテーター体験の比較」，心理臨床学研究，６（2），40-49.

野島一彦（2000）．エンカウンター・グループのファシリテーション，ナカニシヤ出版

野島一彦・下田節夫・岡村達也・高橋紀子・吉村麻奈美（2017）．“個人臨床”と“グループ臨床”について語り合おう，跡見学園女子大学文学部臨床心理学科紀要，４，45-61.

Rogers(1957). The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change. Journal of consulting Psychology, 21, 95-103./伊藤博訳

（1966）「パースナリティ変化の必要にして十分な条件」，岩崎学術出版，第 6 章，117–140.

Rogers（1959）. A theory therapy : Personality and interpersonal relationships as developed in the Client－Centered framework. In S, Koch（ed.）Psychology : A study of a Science, 3. Formulations of the Person and the Social Context./伊藤博編（1967）パースナリティ理論（ロージァズ全集第 8 巻），岩崎学術出版社，第 5 章，165–278.

Rogers（1970）. Carl Rogers on Encounter Groups. Harper & Row./畠瀬稔・畠瀬直子訳（1973）「エンカウンター・グループ－人間信頼の原点を求めて」，創元社./畠瀬稔・畠瀬直子訳（2007）「新版エンカウンター・グループ－人間信頼の原点を求めて」，ダイアモンド社.

下田節夫（2016）. グループから学んで－ベイシック・エンカウンター・グループで起きることとスタッフのあり方について－，人間性心理学研究，34（1），109–120.

鶴田和美（2001）. 学生のための心理相談：大学カウンセラーからのメッセセージ，培風館.